

2021 7/13

No.2142

毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
— 神奈川政経懇話会 —



6月28日から3日間、県内3カ所で東京五輪聖火のセレモニーが無観客で行われた。公道リレーに代わり「トーチキス」で聖火をつないだ。



視点点描	3
慣用句と「差別」表現	
講演録	4
我が国のデジタル改革について デジタル改革担当大臣 平井 卓也	
アジアの風	7
「民主」という魔力	
社会	8
「雨」上がるまでここに 若い女性に居場所を提供	
経済	10
「手数料」から「残高」主義に 地方銀行、営業手法を転換へ	
国際	12
“文化大革命”が再来か 見え隠れする習政権の限界	
国際	15
香港人である続ける苦悩 民主派新聞リング日報の停刊	
NNAアジア経済レポート	19

【お知らせ】神奈川政経懇話会ではホームページと会報「政経かながわ」に会員コーナーを設け、新商品の紹介、地域貢献活動、人事などジャンルを問わずさまざまな会員情報を掲載しています。掲載の問い合わせなどは事務局 ☎045 (226) 2121。

視点 点描



慣用句と「差別」表現

アラサーで舌がんを発症した友人がいる。幸い初期段階での発見で転移はなかったが、手術で舌の一部を切除した。20年たった今も再発はなく経過は良好のようだ。だが退院直後に比べればだいぶ良くなったとはいえ、わずかだが滑舌は悪くなった。

「舌足らず」という言葉がある。『広辞苑第7版』によると、「舌の

まわりが悪く、発音の不明瞭なこと」。そこから派生して「物言いや文章表現が不十分なこと」との意味でも使われる。

新型コロナウイルスのワクチンを巡り、閣僚が6月、会見でこの言葉を使った。以前の発言を訂正した際の釈明で、「言葉が足りなかった」との趣旨だろう。

会員制交流サイト（SNS）な

どで炎上したわけでもなく、多くの人は違和感を覚えなかったのかもしれない。だが筆者の頭には、先の友人の顔が浮かんだ。病魔で文字通り「舌足らず」になった彼は嫌な思いをしなかっただろうか、自分を否定されたと感じなかっただろうか。

日本語には、身体の一部を表す単語を用いた比喩表現が数多くある。いずれも長い歴史の中で生まれた言葉で、日本語の豊かさの現れでもある。半面、負のイメージの象徴として使われるものも少なくない。この「舌足らず」や「片手落ち」がそれだ。

人としての尊厳を傷ついたり、差別につながったりする言葉はなるべく避けたい。神奈川新聞の記事では、鉄道事故の影響人員を表現する際、常套句じょうとうくだった「●万人の足が乱れた」を、随分前に「●万人に影響した」に見直した。足

が不自由な方への配慮が理由だ。一方、言い換えが行き過ぎれば「言葉狩り」になり、表現の幅を狭めかねない。

松江市が職員研修の資料として作成した「人権の観点からの公的表現の手引き」には、こうある。

「何気なく使う言い回しが、結果的に差別や偏見を助長することがある」「発信者にとつては何も問題がないと思える表現でも、立場が変われば不愉快であったり理解しづらいこともある」。担当者は「手引きを基に機械的に言い換えられているのではなく、表現と人権について考えるきっかけに」と強調する。言葉は人を傷つける凶器にもなれば、背中を押し人生を支える力になることだってある。安易な慣用句に頼らず、適切な表現を考え続けたい。

（神奈川新聞社統合編集局長

佐藤 奇平）